# 「英語ノート（試作版）」で児童が触れる動詞フレーズの量と質

-Token および Type Frequency の観点から児童の動詞フレーズの学びに着目して-

大阪教育大学　柏木賀津子

本研究の一つ目の目的は、小学校外国語活動に向けて配布された『英語ノート』を活用した授業で扱われる目標表現や，先生の英語の語りに使われる動詞フレーズの量を予測し分析することである。『英語ノート』の分析の結果，コーパスでもよく使われる動詞（do, go, have, like, make, play, say など）が頻度順の上位に見られた。これらの動詞は文の核であり，他者とのやりとりで大切な働きを持つと考えられる。一方では，コーパスに比べるとあまり使われない動詞（get, give know, take, think など）も見られた。二つ目の目的は，頻度順の上位となった動詞フレーズについて，『英語ノート』での音声形式と意味を繋ぐ言語使用場面（context）を分析し，そこではどのように子どもの認知的な学びが期待されるのかを考察することである。その結果，動詞フレーズの token frequency だけでなく，type frequency も見られる場面では，子どもの認知的な学びがより期待されると考える。英語活動で子どもが触れる動詞フレーズは，子どもにとって，ひとかたまりの固有の表現（chunk）であり，音声から気づく動詞の軸語スキーマ（例：kick X, throw X）への認知的な学びになると考える。

キーワード：『英語ノート』，動詞フレーズ, Token &Type Frequency

## 1.　背景

平成 23 年度からの小学校 5，6 年生での外国語活動の必修化に伴い，平成 21 年度からはその移行措置期間として，年間 0~35 時間の外国語活動が公立小学校で実施されている。

外国語活動の留意事項として，「児童の柔軟な適応力を生かして，外国語の音声や基本的な表現に慣れ親しみ，聞く力などを育てる」（文部科学省，2008a）ことを大切とし，「細かい文構造などに関する抽象的な概念を理解したりすることや，パターン・プラクティスやダイアログの暗唱，スキルの向上のみを目標とした指導は外国語活動の目標とは合致しない」（文部科学省，2008e）と明記された。文部科学省は，活動内容の拠り所として『英語ノート（試作版）』（文部科学省, 2008b）と『英語ノート指導資料』（文部科学省, 2008c），外国語学習の入門期として最近の言語習得研究をふまえた『小学校外国語活動研修ガイドブック』（文部科学省, 2008d），ICT 教材として『英語ノートデジタル教材（試作版）』（文部科学省，2008f ）を全国の小学校等に配布した。また，配布教材は各小学校等の取組に合わせ，柔軟に活用することとなった。

言語のルールを教えこむのではなく，意味のある言語活動に慣れ親しめるよう，上記の指導資料を活用し, teacher talk（子どもに分かりやすい英語での語り）を工夫することで、下記のような指導展開が期待される。しかしながら，音声から学ぶ英語活動で高学年児童がどのように英語の意味を推測しているのかについての研究はまだ少なく，指導展開の①～②のインプットが，③～④のアウトプット活動に繋がるかどうかについては今後の実践に委ねられていると言えよう。

『英語ノート』の指導展開
（各ユニット４時間×９レッスン）

① 短い話を聞いて日常生活の話題や異文化に興味を持つ （small talk など）。
② 身の周りの単語や表現に慣れ親しむ（word, chant, game など）。
③ 場面に沿って短いやりとりを聞いたり話したりする（ペアワークなどによる情報収集活動など ）。
④ 学習した表現を使ってミニ発信へ （show & tell ,タスク活動, インタビューなど）。

高学年児童の英語活動での音声情報の意味理解について，筆者は現在までに，次のような観察を行った（柏木, 2007）。

① 動作等で意味を推測しやすい動詞（drink, break）に比べ，動作では意味を推測しにくい獲得動詞，知覚動詞（need, want, smell, think）等，抽象度の高い動詞の理解度は低かった。また，抽象度が高い動詞の理解度では、児童による差が見られた。
② 授業後の子どもの動詞フレーズの意味記述からは，概ね６割~８割程度が大まかな意味を推測していることが分かったが，すっきり分かるという反応ではなかった。(理解度例：wash-89%, break-86%, need-56%)
③ 授業の回数が増えると理解度は高くなった。

この研究から，高学年の児童は，動詞フレーズと,そこに含まれる動詞に触れる頻度が高い場合はある程度推測しているが，頻度が低い場合や，抽象的な動詞では意味を推測しにくい状況である事が分かった。

今度,『英語ノート』では継続した学習となるため、児童の音声形式と意味の繋がりに対する子どもの推測と言葉の認知的学習を研究することは重要であろう。意味の推測力を考慮し,「気づく楽しさ」や「学びの手ごたえを得る楽しさ」のある指導を展開していかなければならない。

## 2. 子どもの認知学習に関する先行研究

### 2.1. 音声形式と意味の繋がり（form-meaning connection）に対する子どもの認知的な学び

#### 2.1.1.英語の音声形式と意味の繋がり

熟達した指導者が子どもに語りかけるとき，意識的に指導者の語りに目標表現（target item）を入れて使うことがある。このような指導者が意識的に学習者に target item への気づきを促すようなインプットはinput flood (Wong, 2005) として知られ，先生が子どもに英語に触れさせる豊かなインプットとしての先生の語り（teacher talk）の大切な要素である。指導者がそれを意識して目標言語を話すと，意識しない場合に比べて学ばせたい言語材料（target item）は約２倍のインプットになる例が示されている。学習者は指導者の意味のある表情や振る舞いを通してたくさんの exemplars に触れることができる。input flood は良いインプットの重要な鍵である。リズム良い繰り返しや同じ item の一部を入れ替えるようなインプット（I can sing. I can fly. I can walk and run. Now you can see a ～. ），英語の指示で作品を作ったり，絵を描いたりする活動（Fold the paper up to this line. Draw a square on it. ），small talk （絵や身振りと共に季節の話を聞かせる）等はこの例である。

音声から学ぶ学習者は，具体的な場面で exemplars に触れ，それを真似しながら発話する学習 (imitative output) を頻繁に行う。Anderson(1993) の ACT-R 理論（Adaptive Control of Thought-Rational）に拠ると，学習者は，インプットとアウトプットをマッピングし，その exemplars をもう一度記憶から呼び起こすとき，手続き知識 (procedural knowledge) を得，それが生産的なルール (productive rule) の創出に繋がると述べている（Anderson, Fincham and Douglass,1997)。また， Skehan（1998）は，言語のルールの知識を学ぶこと（rule-based knowledge）と同時に，ひとかたまりの固有の表現（chunk）にたくさん触れて使う学び（exemplar-based knowledge）が必

要であると述べている。

このように，「聞いてだいたいわかる英語」を通して豊かな exemplars を提供できる授業の実現は児童の認知学習に重要である。現時点では，外国語活動導入に伴う指導体制として容易ではないが，①目標言語に堪能な指導者がいる。②クラスサイズが小さい，または複数の指導者がティームを組めること（Poole, 2005）は音声から英語を学ぶ初級者に大切であろう。

2.1.2.音声形式と意味の繋がりは，子どもの学習にどのような意味を持つのか

子どもが英語の意味を推測しながら模倣をしたり繰り返したりすることは，それ自体が第 2 言語学習の過程である（VanPatten, Williams and Rott, 1994）。token frequency と，type frequency の両方が高く，「意味への交渉」が起こる場面が大切な学びとなる。下記に，英語学習における子どもにとっての chunking（Ellis, 1996），type frequency（インプットの中に特定の文構造を伴う全く同じ exemplars が現れる頻度），および type frequency（インプットの中に特定の文構造を伴うが一部異なる exemplars が現れる頻度）の役割をまとめる（Bybee, 2008）。

① chunking

・第 2 言語学習でのチャンキングは procedural knowledge の財産そのものとなる。

② token frequency

・言語形式に見合う記憶や概念の保存効果（conserving effect）となる。

・言語の規則を学ぶ以前に，自ら分析しようとする学習者の自律性（autonomy）をもたらす。

・例えば，“ be going to ”のようなフレーズは頻度の高い item として聞こえる音の通りの還元効果（reducing effect）がある。生産的かつ知覚的な学習に貢献する。

③ type frequency

・インプットをカテゴリー化（categorization）し，類推（analogy）させる働きをし，新しい言語パターンの学びや，文構造の多産性（productivity）への決定要素となる。

2.2. Usage-Based Model における動詞の Schema Formation

Tomasello（2003）は，母語習得における 2 歳児の認知スキルと動詞習得について，次のように結論づけている。

子どもは母語においては相当量のインプットを受け，16 か月の子どもの発話は 6 か月後には構文的に変化してく。子どもは最初，個別の表現を模倣し（item learning），図 1 のように個々の表現（item）は，「動詞の島」のような状態でお互いに関連性を持たない（例：get sauce, get me up）。 次に軸語スキーマの中のパターン（get X）のスロットを形成し，もののカテゴリーやスキーマを組み立て，構文を一般化していく（schema formation of verbs）。子どもはさらに token frequency と type frequency の両方の input に触れる。動詞と目的語を結合（Verbs→Object）しながら意思を伝えようとする試みの繰り返しが，子どもの動詞獲得であり，最初の言語構築である（Tomasello,2003）。

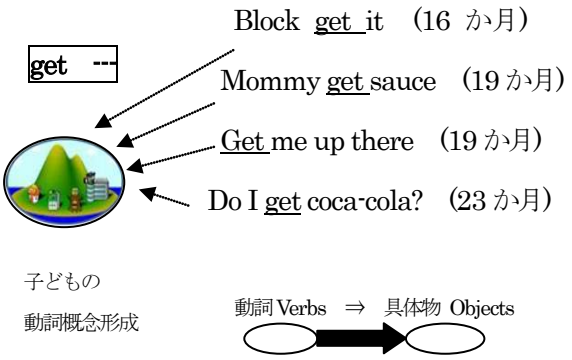


図 1 2 歳児の動詞の島（母語習得）

図 1 は，筆者が、Tomasello（1994）に基づいて，「動詞の島仮説」の概念を，（get --- schema formation）の例として整理したものである。母語習得に比べると外国語習得ではインプットの量が少ないが，生産的なアウトプットは，やはり動詞獲得を中心に展開されるのではないだろうか。

## 3. 研究の目的

### 3.1. 研究の目的

本研究の目的は以下の二つである。

目的①

『英語ノート』を活用した場合，授業で扱われる目標表現や，teacher talk に使われる表現に含まれる，動詞フレーズの（exemplars）の量を分析する（分析Ⅰ）。

目的②

分析Ⅰの結果、頻度の高い動詞フレーズ例を挙げ，その音声形式と意味を繋ぐ言語使用場面（context）が，児童のコミュニケーション能力の育成にどのような意味を持つのかを分析する（分析Ⅱ）。

### 3.2. 動詞フレーズに着目する理由

語彙の中でも動詞を含むひとまとまりの表現（本研究では動詞フレーズと記述する）に着目する理由は，次の 3 点である。

① 動詞フレーズは文の核であり，動作等を伴う場面や，相手とメッセージを伝え合うインタラクションで，子どもの意味への推測が起きやすい表現である。

② 先生のインプットを模倣したり，繰り返したりする活動や，全身反応教授法（TPR）等により，児童は自然に動詞を耳にし，口ずさんでいると考えられる。

③ 母語習得研究においての動詞獲得は，子どもにとっての最初の認知的な営みである（Tomasello, 1994, 1998, 2003）。

上記3点目は,母語習得における2歳児の動詞習得研究（Tomasello, 1994, 2003）で研究されてきた用法依存型言語習得モデル（Usage-Based Model）に基づくものである。Usage-Based Model では，子どもの認知的な学びは「目標言語の使用から創られること」，「それらの形成過程は，他者との関わりの中での相手の意図を予測することと大きく関わる」と考えられる。本研究では，言語発達は一般的認知の発達の側面であるという「認知発達的考え方」（文部科学省, 2008d）について考察し，小学校外国語活動の可能性を探っていきたい。

## 4. 分析方法

『英語ノート（試作版）』,『英語ノート指導資料』，および『英語ノートデジタル教材』における指導の実際用にモデルとして提示された英文全てを対象として動詞フレーズを抽出し，token & type frequency で分類する。

① 外国語活動は，文法や文字を前提とせず，指導者のクラスルームイングリッシュ，動作や表情，言語が扱われる場面等に支えられて英語の音声を聞くことで学ぶ。従って音声で聞いた時の動詞の chunking （ひと固まりの表現）は固有の表現として扱う。

② 14 の分析例 （make を中心とした chunking）

make a line/ make a straight line /make a group/make groups/ make an original story/ let's make them together/ make pairs/ make a list/ make cards/ make pairs（2 回目)/I can make sushi /Let's make rice balls/make an omelet /Let's make sushi（2回目）/

（『英語ノートⅡ』より）

上記 14 例の分析では，make を含む chunking について， token frequency が 14 回で，type frequency は 12 回と数える。*make pairs* が 2 回，*make sushi* が 2 回，同じ形で出てくるからである。これ以外は全て独立した表現とする。14 例の chunking を子どもが聞いた時には，make という表現が際立って聞こえるわけではない。make a group を音で聞いた時は/meikəgru:p/に近い音声と考えられる。子どもが何度も耳から聞くであろう make + X, I can make + X 等が含まれるインプットの量と質を分析する。分析上の注意点は，以下の通りである。

・say, says, said 等は，子どもにとっては別の音声であるが，同一表現として扱う。

・Do you ~? における助動詞 do は数えない。尋ねるときの文の鋳型として考える。

・is, are 等の繋詞は，分析の対象にしない。

・それぞれの学年で触れる動詞を token と type 別順に分析し，BNC[1] コーパスおよび，KUBEE1850 （石川，2006）による動詞の token frequency と比較する。
・子どもの音への記憶は短期であると考えられるので, 5 年生と 6 年生の 18 レッスン（9 レッスン×２学年）ごとに分けた分析も行う。

5.分析の結果と考察

5.1.　母語習得における動詞カテゴリー

音声から獲得する動詞について，表 1 に Ninio（1996）の研究をもとに母語習得初期の 2 歳児の子どもの発話を動詞カテゴリー別に抽出した。

表 1.　母語習得における初期の動詞カテゴリー

| カテゴリー | 動詞例 |
|---|---|
| 動作主動詞<br>agent-controlled verbs | break cut clean |
| 創造動詞<br>creation verbs | make draw write |
| 獲得動詞<br>obtaining verbs | put take get want give bring find want |
| 知覚動詞<br>perception verbs | hear see smell touch |

上記の表中では，獲得動詞 get や知覚動詞 see などが最も早く 2 歳児の子どもの発語に現れる。母親の子どもへの語りかけに頻繁に使われるからであろう。get, see などの獲得動詞や知覚動詞も早く人と関わるコミュニケーションにおいて必要となる動詞である。教室で外国語に触れる場合にも共通点はあると考え，前述のコーパスと共に，この表を考察の拠り所とする。

5.2.　分析 I

5.2.1.　token frequency の量(表 2,3,4,5 より)

英語ノートの指導書を参考にした授業で使われると考えられる総動詞数（異なり）は 130 であった（表 2)。インプットに一度しか含まれない動詞も多いため，指導上の参考となる上位 25 程度までを整理し，主に上位の動詞について考察する。

表 2.『英語ノートⅠ,Ⅱ』　総動詞フレーズ数

| | 5 年<br>『英語ノートⅠ』 | 6 年<br>『英語ノートⅡ』 | 総動詞数<br>（異なり） |
|---|---|---|---|
| Token | 1049 | 995 | 130 |
| Type | 499 | 451 | |

5 年生の token frequency 上位 10 では, like（160 回）, study（69 回）, have（54 回）, say（32 回）, draw （31 回）, put （26 回）, go（25 回）の動詞が現れた。また, 25 位までの中は, take, play, want （want to 含む）, do, see, ask などの動詞が入った。

6 年生の token frequency 上位 10 では, play（119 回）, go （84 回)),want to （74 回）, say （2 回）, pull（45 回）, like（38 回）, look（38 回）, listen（34 回）, make（31 回）, do（28 回）の動詞が現れた。また, 25 位までの中には, write, have ,draw, eat, take, get , put , ask などの動詞が現れた。

次にあげる動詞はコーパス表 8 に示す BNC や KEBEE1850 と『英語ノート』に共通であると言える。繋詞（Be 動詞）を除き，動詞変化はここでは原型に含む。

do, get, go, have, know, like, make, play, say, see, take, want

＊以下，アルファベット順で表示する。

5.2.2.　type frequency の量（表 2,3,4,5 より）

5 年生の type frequency 上位 10 では， like（38 回）， say (31 回)， have (26 回)， make（23 回）， draw (15 回)， want (15 回)， put（12 回）， listen（11 回）, go（11 回）， do（11 回）の動詞が現れた。また, 25 位までの中には, write, take, ask, change, know, eat などの動詞が入った。

6 年生の type frequency 上位 10 では，play

（29 回）, say（27 回）, like（24 回）, open（24 回）, make（22 回）, want（16 回）, do（16 回）, have（16 回）, go（15 回）, write（15 回）の動詞が現れた。また，25 位までの中には,write, have ,draw, eat, take, get ,put ,ask などの動詞が入った。

次の動詞はコーパスと『英語ノート』に共通であると言える。

| |
|---|
| do, go, have, know, like, make, play, say, see, think, want |

『英語ノート』では，上記のような動詞についてはある程度の token & type frequency が期待され，それらの動詞を中心にしながら,初期の言語スロットの入れ替えが teacher talk に含まれ，活動の中で子どもがそれを真似しながら使う機会があると言えよう。

しかし，表 5 のコーパス上位頻度動詞と，表 3，4 の『英語ノート』の token & type frequency を比較すると，下記のように，コーパスでは頻度が高くても,『英語ノート』の指導ではあまり使われない動詞もある。take, get ,go, know, take 等は使われている頻度は低い。また、表 1 の自然な母語習得と比べても，獲得動詞（put, take, get, want）や感覚動詞（hear, see）の頻度は低い。このような基本的な動詞は先生と子どもが関わる場面で，意識的に teacher talk に入れていくことが大切であろう。

| |
|---|
| come, get, give, go, know, make, take, use, think, work |

5.3　分析Ⅱ

『英語ノートⅠ』－レッスン 5 “I don't like blue.”（いろいろな衣服）では，token と type frequency の回数が，他のレッスンに比べ最も接近していた（図２―以下，レッスンの表示を英Ⅰ―L5 とする）。両方で頻度の高かった like（token 30/type 28）, have（token 16/type 16）, get（token4/type4）は，子どもが親しみやすい頻度で触れられる活動が設定されている。尚，両方で頻度の高かった like, have, get を含む代表的なフレーズをグラフの次に下に示す。

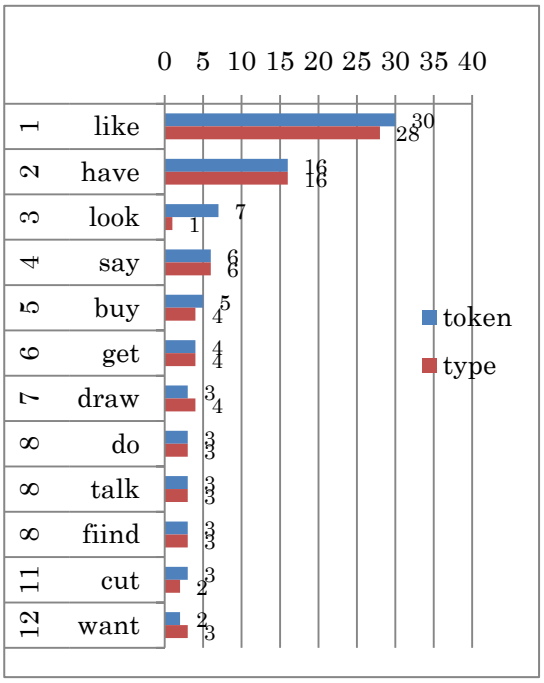


図 2.　英Ⅰ―L５　“I don't like blue.”
（横軸：頻度＝回数）

英Ⅰ―L5 より　（　）は回数

・like を含むスロット
　Do you like~?　(8)
　I don't like.　(9)
　I like~.　(11)
　I like that.　(1)

・have を含むスロット
　Do you have a~?　(6)
　I don't have~.　(3)
　I have a~.　(7)

・get を含むスロット
　Get into pairs.　(1)
　What did he get?　(1)
　Get a card.　(1)
　Get five kinds of~ .　(1)

ここでは身近な「いろいろな衣服」について，外国の民族衣裳にも興味を持たせ，既習の表現（挨拶をする，色を表す，お礼を言う）を使って着ている服を褒め合う，ほしい服の注文を聞く，伝えるなどの場面が設定されている。ロールプレイによる子どもどうしのインタラクショ

ン，服のデザインを考えるタスク，買ったものを見せながらのショー&テル等がある。意思を伝え合う時は，もう一度相手に聞き返したり，相手のために繰り返してあげたりする機会や，指導者が気に入った服を手に入れた子どもに“What did you get?” “What did the girl buy?”など，場面をとらえた質問も想定されている。

この場面で子どもの意味への推測力（認知的な学び）が最も働くのは，“yellow shoes”，“blue pants” などの知っている単語がいくつかの異なる type 表現の中に入れ替わり使われるとき，その周辺にある単語（like~, have~）や，好きでないもの（don't）を伝えるときの言語パターンを音声から見つけたときではないだろうか。指導者がそれを知って子どもに語りかけ，自分の好きな衣装を伝えたくなるやりとりに導くことができれば，like, have, get などを含む token と type 両方に豊かに触れさせることができるのではないかと考える。

以上のような認知的な学びに最も適している活動は，『英語ノート』の他のレッスンにも見ることができる。棒グラフで token と type の両方が伸びている動詞があるレッスンはそのような機会が多いと考えられ，下記に例を挙げる。

例①：英Ⅱ－L7 は，get up, go to school, eat lunch, watch TV など一日の動作を表す表現が豊富で，TPR やジェスチャーで動きのある学びができる。しかし，図 3 を見ると，token が多く，次々と出てくる動詞の意味をあまり推測できないまま，次に進む可能性もある。ここで触れた表現は，その後もルーティーンワークに入れて type frequency を増やし，スパイラルに触れることで，もっと「気づく楽しさ」や「手ごたえを得る学び」を与えることができるであろう。

例②：英Ⅱ－L 8 は，「大きなかぶ」のお話である。伝承されてきた古典的なストーリーには言葉のおもしろみがあり，十分な token に触れながら，「かぶ」を引っ張る登場人物による type（□＋pull＋X）が含まれている。pull を挟んだ言葉のスロットに気づくタイミングが生まれるかもしれない場面である。pull（token44/type7）は，劇活動をとおして token にも type にも十分触れられるだろう（図 4）。

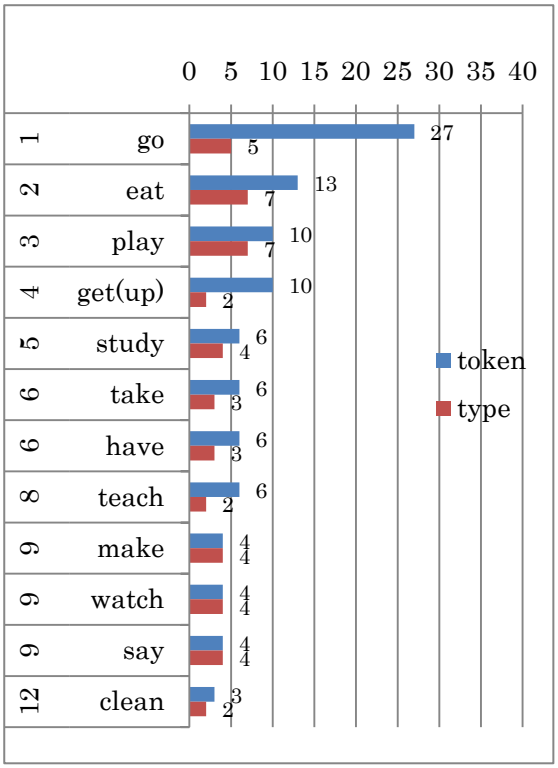


図 3. 英語Ⅱ－L7 “What time do you get up?”
（横軸：頻度＝回数）

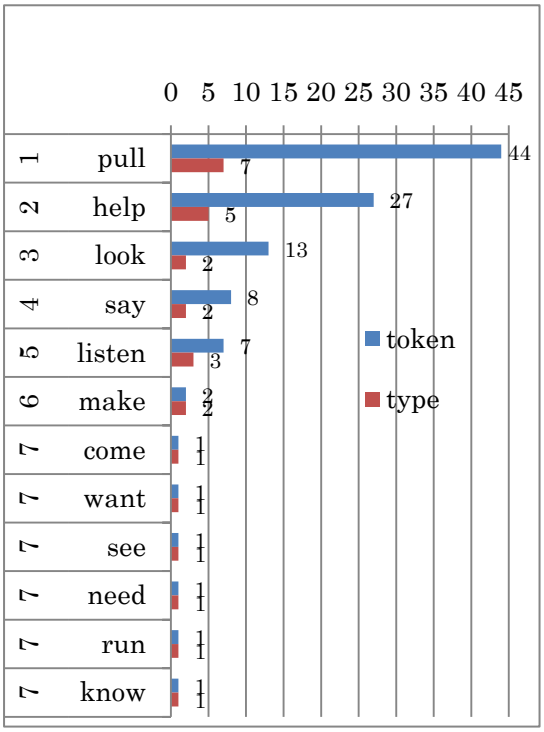


図 4. 英Ⅱ－L8 “Please help me.”
（横軸：頻度＝回数）

## 6. 考察とまとめ

分析Ⅰから，『英語ノート』を活用した場合の動詞フレーズの（exemplars）の量について次のようにまとめることができる。

① コーパスや母語習得でも使用頻度の高い動詞が授業での teacher talk の動詞フレーズにも含まれる（do, go, have, like, make, play, say）。ある程度の token & type frequency が期待される。また子どもの生活に密接な動詞（eat, draw, study）などに親しみながら，初期の言語スロットの入れ替えを体験的に使う機会があると言えよう。

② コーパスや母語習得に比べると，『英語ノート』の活用では使用頻度の低い動詞もある（take, get , know）。コミュニケーションに重要となる獲得動詞（put, take, get, want）等や感覚動詞（hear, see）などは，意識的に teacher talk に入れ豊かな言語活動をめざすことが大切であろう。

分析Ⅱでは，分析Ⅰで頻度の高かった動詞フレーズ例と，その音声形式と意味を繋ぐ言語使用場面（context）を分析した。その結果，動詞フレーズが用いられた次のような場面では子どもの認知的な学びが期待されると考える。何れも token frequency が多く，type frequency も見られた。

英Ⅰ－L5（図２参照）より

① 学校で友だちと具体的に何かに取り組む（食べる，遊ぶ，創る，伝える）。

② 英語を学んでいることを忘れて，英語の指示を聞きながら作業に夢中になる。

③ 服を選ぶ，行く場所を選ぶ等，意思決定をして，相手と関わって学ぶ。

④ 先生の語りによって，一人の子どもの発話を他の子どもにフィードバックする。

英Ⅱ－L7（図３参照）より

⑤ 目に見えにくい動詞などの表現が大切な役割を果たしており，動作などとともに,意味の推測ができる（動詞等の schema formation,や空間移動を認知する）。

⑥ 長く伝承してきたお話などで，内容を伴ったリズム良い繰返しがある。

⑦ 言語スロットの一部が次々入れ替わるようなセリフや言語活動がある。

今後，小学校外国語活動では，『英語ノート』が広く活用されることが予想される。その際には音声から学ぶ指導において，子どもが触れる英語表現を豊かなものとするためには，安易に表現の語数や文型のレベルを上げるのではなく，耳から覚え，模倣できる程度の token で慣れ親しんだ表現を type で言い替えて幅のある表現を聞かせること，実際に相手と関わる場面で音声形式と意味の繋がりを見つけることが大切であると考える。そのためには, small talk や絵本などを用いて，指導者が英語を聞かせたり，子どもが真似をして使ったりする中で，一度親しんだ表現を、異なる場面でも「見つける」楽しさのある授業が必要である。そのような授業は，子どもが言葉のスロットや言語パターンを specific examples として蓄える機会を与えることができるであろう。本研究の分析結果を，英語ノートやデジタル教材の活用，カリキュラム作成，言葉の力を育てる指導の工夫に役立てたい。

注

1．BNC は，現代の話し言葉，および書き言葉のイギリス英語，１億語のコーパスである。

参考文献

石川慎一郎（2006）．「KUBEE1850.V1.0.2」(http://www11.ocn.ne.jp/~ishiwshin/kubee.html).2006 年 11 月 4 日.

柏木賀津子　(2007)．「小学校英語教育における動詞の役割と子どもの Schema Formation　-子供の認知プロセスに着目したアニメーション教材の開発を通して- 」，*STEP　BULLETIN, 19,* 57-70.

文部科学省　(2008a)．『小学校学習指導要領』東京：文部科学省.

文部科学省　(2008b)．『英語ノートⅠ，Ⅱ，(試作版)』東京：文部科学省.

文部科学省　(2008c)．『英語ノート指導資料

Ⅰ,Ⅱ, (試作版)』東京：文部科学省.
文部科学省 (2008d).『小学校外国語活動研修ガイドブック』東京：旺文社.
文部科学省 (2008e).『小学校学習指導要領解説外国語活動編』東京：開隆堂.
文部科学省 (2008f).『英語ノートデジタル教材（Ⅰ：5年生, Ⅱ：6年生, 試作版)』.
Anderson, J. R. (1993). *Rules of the mind.* Hillsdale, NJ: Lawrence Erlbaum Associates, Inc.
Anderson, J.R., Fincham, J.M. & Douglass, S. (1997). The role of examples and rules in the acquisition of a cognitive skill. *Journal of Experimental Psychology: Learning, Memory, and Cognition*, *23*, 932-945.
Bybee, J. (2008). Usage-based grammar and second language acquisition. In P. Robinson & N. Ellis. (Eds.). *Handbook of cognitive linguistics and second language acquisition.* New York: Routledge. 216-236.
Ellis, N, C. (1996). Sequencing in SLA: phonological memory, chunking and points of order. *Studies in Second language Acquisition*, *24(2)*,143-188.
Ninio, A. (1996). Path breaking verbs in syntactic development and the question of prototypical transitivity. *Journal of Child Language*, *26*, 619-653.
Poole, A. (2005). Focus on form instruction: foundations. *Applications, and criticisms, Vol.5*, *No.1*, 47-56.
Skehan, P. (1998). *A cognitive approach to language learning,* Oxford Applied Linguistics.
Tomasello, M. (1994). *First verbs: a case study of early grammatical development*, Atlanta: Emory University.
Tomasello, M. (Ed.) (1998). *The new psychology of language. cognitive and functional approaches to language structure.* London, England: Mahwah, NJ: Lawrence Erlbaum & Associates, Inc.
Tomasello. M. (2003). *Constructing a language: A usage based theory of language acquisition,* Cambridge: Harvard University Press.
VanPatten, B., Williams, J., & Rott, S. (1994). Form-meaning connections in second language acquisition. In VanPatten, B., Williams,J.,&Rott,S. ) Eds. ) .*Form-meaning connections in second language acquisition.* Mahwah, NJ: Lawrence Erlbaum Associates.Inc. 1-26.
Wong, W. (2005). *Input enhancement: from theory and research to the classroom*, New York: McGraw-Hill.

資料

| Rank | 表３ Type 頻度を基準とした Type&Token 両方高い動詞順（英語ノートⅠ） | token | type | 表４ Type 頻度を基準とした Type&Token 両方高い動詞順（英語ノートⅡ） | token | type | 表５ 動詞の Token 頻度が高い動詞順（コーパス） BNC | KUBEE |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | like | 160 | 38 | play | 119 | 29 | is | is |
| 2 | say says said | 42 | 31 | say said | 52 | 27 | was | do |
| 3 | have has had | 54 | 26 | like | 38 | 24 | be | go |
| 4 | make | 38 | 23 | make | 31 | 22 | are | have |
| 5 | draw | 31 | 15 | have | 19 | 16 | have | say |
| 6 | want wants want to | 19 | 15 | do did doing | 28 | 16 | had | get |
| 7 | listen | 35 | 11 | want want to | 74 | 16 | said | like |
| 8 | go | 25 | 11 | write | 21 | 15 | like | know |
| 9 | put | 26 | 12 | see | 23 | 14 | see | see |
| 10 | do did | 19 | 11 | draw | 18 | 11 | know | come |
| 11 | study | 69 | 10 | heip helped | 23 | 10 | get | laugh |
| 12 | write | 22 | 10 | pull | 45 | 8 | made | think |
| 13 | find | 15 | 10 | swim | 19 | 8 | did | look |
| 14 | look | 32 | 9 | put | 14 | 8 | work | make |
| 15 | Take takes | 20 | 9 | ask | 13 | 8 | think | take |
| 16 | guess | 13 | 9 | sing | 13 | 7 | being | want |
| 17 | ask | 12 | 9 | eat | 16 | 5 | go | tell |
| 18 | get | 10 | 7 | get | 15 | 4 | got | play |
| 19 | change | 9 | 7 | take | 15 | 4 | make | use |
| 20 | know | 8 | 7 | turn | 14 | 4 | take | give |

# Quantity and Quality of English Verb Phrases which Elementary School Students are Expected to be Exposed to by Using “English Notebook (Pilot Version)” : Focus on the Learning of Verb Phrases by Children in Terms of Both Token and Type Frequency

Kazuko Kashiwagi
Osaka Kyoiku University

The first purpose of this article is to predict the quantity of English verb phrases, which elementary school students are expected to be exposed to by using “English Notebook” distributed by the Ministry of Science and Technology. The research shows that several verbs, such as do, go, have, like, make, play, say, and so on appeared in a higher rank with considerable frequency in comparison with the Language Corpus. These verbs are the core of sentences and essential in interacting with other people. On the other hand, there were some words, such as get, give, know, take, think and so on which were in a lower rank. The second purpose of this article is to analyze the verb phrases in the language context of “English Notebook”, in which sound-meaning connection can occur, and to discuss how much can be expected in children’s cognitive learning. According to the analysis, it is considered that children’s further cognitive learning is feasible in some lessons which embrace not only token frequency but also type frequency of verbs. Absorbing English verb phrases, which are chunks as examples, can lead children to a significant cognitive learning, in which they are able to notice the schema formation of verbs（kick X, throw X ）from the sound input.